

安威川ダム建設事業に係る論点まとめ（素案）

1 治水機能について

大阪府河川整備委員会では安威川ダム建設事業を含む「淀川水系神崎川ブロック河川整備計画」の策定に向け、現在も審議が進められているところであるが、本委員会が再々評価において提起した神崎川ブロック全体を含む治水機能の技術的側面の検討については、当該委員会において治水安全度や基本とする高水の設定、ダムによる治水手法の妥当性や神崎川ブロック全体の治水計画との整合性などについて検証がなされており、治水機能についての基本的な方針については審議が尽くされたとのことである。

本委員会としては、その検討経過や内容を審議し、治水対策としてのダムの必要性や治水効果の早期発現、規模等について改めて確認し、妥当と判断できる。

近年一極集中型の豪雨が各地で甚大な被害をもたらしているが、このような超過確率で発生する豪雨の発生メカニズムの研究やその対策については、今後の河川整備のあり方を考えていくなかで、さらに検討を進めて行く必要がある。また、こうした事態に備え、ハード面の整備だけでなく、ハザードマップの普及などソフト面の対策も併せて講じて減災していく必要がある。

長期的な観点からは、河川における治水対策だけでなく、流域における森林が持つ涵養効果や森林の保全管理の現状を踏まえつつ、より総合的な視点に立った治水のあり方について関係機関と連携しながら今後検討を進めていく必要がある。

2 利水機能について

水需要予測については、近年の水需要実績や社会経済情勢の変化などを踏まえ、水源確保量を日給水量 253 万 m^3 から 231 万 m^3 に下方修正を行っている。

また、安威川ダムを含む府全体の水源計画については、府民負担の最小化、既投資の有効活用、危機管理などの観点から安威川ダムからの給水量を日量 7 万 m^3 から 1 万 m^3 に修正している。

本委員会としては、その検討経過及び安威川ダムの利水機能の必要性や規模等について審議したところ、妥当と判断できる。

これに伴い、ダム規模が縮小し、総事業費が現行計画の約 1,400 億円から約 1,370 億円となり、一定程度のコスト縮減が図られることを確認した。

今回見直しされた府の水源計画については、今後、国における「淀川水系における水資源開発基本計画（淀川フルプラン）」に適切に反映される予定であることを確認した。

3 環境対策について

安威川ダム建設による自然環境への影響とその対策については、「安威川ダム自然環境保全マスタープラン」が策定され、その内容について審議したところ妥当と判断できる。

今回のダムの利水機能の縮小に伴い、周辺自然環境への影響に変化が生じるが、その影響は概ね低減される見通しのためマスタープランに掲げられた基本目標や実施方針には影響はないとのことであり、今後、基本目標や実施方針にしたがって、個々の対策が適切に図られていくことを確認した。